



2024 年度春季学位記授与式 (2025 年 3 月 24 日)

■ TOPICS

- » 2024 年度春季学位記授与式
- » 第 14 回 SOKENDAI 賞
- » 2024 年度期後期 研究科長賞
- » 2025 年度春季入学式
- » 2025 年度前学期フレッシュマンコースを対面開催
- » 統合進化科学コース「理論進化生態フォーラム 2025」開催報告
- » SOKENDAI 社会連携事業「高専生による小型加速器製作を主体とした社会連携事業」高専交流会を開催
- » 2024 年度 第 15 回 国立天文台・総研大天文科学専攻 スプリングスクール 開催
- » 株式会社アカリクとの連携協力に関する協定を締結
- » 「台湾からデニソワ人」記者会見を実施
- » 日本文学研究コース 新入生懇談会を開催

■ 受賞情報

- プレスリリース情報
- 研究助成学生の研究紹介
- メディア情報
- イベント情報
- その他

TOPICS

2025/3/24 2024 年度春季学位記授与式

学位記授与

2025年3月24日(月)、葉山キャンパス講堂にて春季学位記授与式が挙行されました。式典では学長より修了生一人一人に学位記が手渡しで授与されました。その後、学長からの式辞及び修了生代表からの謝辞が述べられ、課程博士47名、論文博士2名が総研大での博士号を手に、将来への新たな一歩を踏み出しました。

■学長式辞

>> URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250324.html>

2025/3/24 第14回 SOKENDAI 賞

左から飯田史織さん、永田学長、加納龍一さん、中川颯也さん

2025年3月24日(月)、学位記授与式に引き続き、第14回 SOKENDAI 賞受賞者3名の表彰が行われました。

氏名 所属

加納 龍一	複合科学研究科 情報学専攻
中川 颯也	生命科学研究科 基礎生物学専攻
飯田 史織	生命科学研究科 遺伝学専攻

>> SOKENDAI 賞は、本学の理念と目的に照らして、特段に顕彰するに相応しい研究活動を行い、その成果を優れた学位論文にまとめて課程を修了し、学位を取得した修了生を表彰する賞として2018年度に創設されました。

>> URL: https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250324_1.html

2025/3/24 2024 年度期後期 研究科長賞

2025年3月24日(月)、SOKENDAI 賞の表彰に続き、2024年度後期研究科長賞者5名の表彰が行われました。

氏名 所属

志川 真子	文化科学研究科 比較文化学専攻
Tirumalasetty Panduranga Mahesh	物理科学研究科 機能分子科学専攻
彌富 豪	物理科学研究科 核融合科学専攻
豊川 広晴	物理科学研究科 宇宙科学専攻
及川 拓実	高エネルギー加速器科学研究科 素粒子原子核専攻

>> 研究科長賞は、研究科において特段に顕彰するに相応しい研究活動を行い、その成果を優れた学位論文にまとめて課程を修了し、学位を取得した学生を表彰するものとして、2018年度に創設されました。

>> URL: https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250324_2.html

2025/4/8 2025 年度春季入学式

学長式辞

2025年4月8日(火)、2025年度春季入学式が葉山キャンパス講堂にて挙行されました。学長から式辞が述べられた後、新入生118名一人一人の名前が読み上げられ、新入生たちは新たな気持ちで大学院生活をスタートさせました。

>> URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250408.html>

2025/4/8 - 4/11 2025 年度前学期フレッシュマンコースを開催

2025年度前学期フレッシュマンコース(日本語)を4月8日(火)から11日(金)まで開催し、89名の参加がありました。今回は、昨年度に続き2泊3日の合宿形式とオンデマンドを組み合わせた形式による開催で、最初の3日間は葉山キャンパスにおいて対面での授業を実施しました。フレッシュマンコースは、「研究者を目指すすべての人が身につけるべき技術・考えるべき問題を学ぶ」「総研大ならではの知的が広がりに触れる中で、異なる分野の人とのつながりを築く」ことを目的とし、新入生を主な対象として集中講義を実施しています。



講義の様子

初日から2日目にかけての「アカデミア探訪」では、総研大で行われる研究活動の多様性と共通性に触れ、大学院での研究生生活のイメージを描くことを目的として、教員によるパネルディスカッションと、在学生（学生企画委員）による企画セッションが行われました。2～3日目の「研究者と社会」では、研究者が社会において望ましい役割を果たし研究者のコミュニティが健全に機能するために必要な倫理規範を洞察する能力の涵養を目的とし、講義とワークショップ形式で授業を行いました。「研究者倫理」と「研究者のための“伝える技術”」はオンデマンド講義として実施しています。



記念写真

講義後のアンケートの「オンラインではなく対面で集まったことは有意義でしたか」という質問には、80%以上の回答者から、「とてもそう思う」という回答がありました。今年度の参加者には、学部時代にオンライン講義ばかりでほとんどキャンパスに通えなかった学生が多くいたことも反映しているかと思えます。個別回答の中では、「研究に追われる日常の中での良いリフレッシュになったとともに、自分をゆっくりと見つめ直すことができた。自分がどれだけ研究が好きかがよくわかった。」「他研究所の似たような分野を研究する人たちと会えて、より自分の視点が広がった」という声もあり、好評でした。初日の講義後には懇親会も開催され、多くの参加者が交流を楽しみ、懇親会後も各自で交流し学生同士の Slack が作られるなど活発に繋がろうとしている姿が印象的でした。また、多くの学生に、次のフレッシュマンコースに学生企画委員として新入生向けの企画に関わりたくて立候補してもらえるなど、学生の積極的な姿勢が感じ取れた最終日でした。多くの受講生が今回のコースに価値を見いだしてくれたことが分かり、運営側として大変嬉しく思います。

次回のフレッシュマンコースは英語で10月開催予定です。

【教育企画開発センター】

2025/2/6 統合進化科学コース 「理論進化生態フォーラム 2025」開催報告

2025年2月6日から8日にかけての3日間、統合進化科学研究センター・葉山キャンパスにおいて、「理論進化生態フォーラム

2025」が開催されました。本フォーラムには、日本全国から様々な所属・学年の学生および研究者（計35名）が参加し、活発な議論が交わされました。

本フォーラムは、若手研究者を中心に、(1) 生態学・進化生物学における理論分野の多様なトピックや技術の共有と(2) 参加者の交流促進や新規共同研究の開拓の場の提供を目的として開催されました。まず、「多様なトピックや技術の共有」の一環として、招待講演者による特別講義や口頭発表が行われました。本学からは、大槻久准教授（統合進化科学研究センター）に、空間モデルの解析方法について講演を行っていただきました。また、「参加者の交流促進や新規共同研究の開拓」に向けた取り組みとして、ポスター発表や懇親会を実施しました。実行委員の予想を超え、講義室やポスター発表会場では深夜に渡るまで活発な研究に関する議論と交流が繰り広げられました。



ワークショップの様子：(左上) 開会式の様子、(左下) 集合写真、(右) 本集会がきっかけで共同研究に至った、石井友一朗氏(左/神戸大)と内海忍氏(右/九州大)

フォーラム終了後のアンケートでは、多くの参加者から「交流が促進された」との声が寄せられ、当初の目的である参加者の交流が促進されたことを実感できました。また、本フォーラムをきっかけに新規共同研究も生まれており、有意義な集会にできたことを嬉しく思います。生態学・進化生物学の理論分野に関わる若手研究者は全国に広く分布しているものの、こうした研究者が一堂に会し議論を深める機会はまだまだ限られています。本フォーラムは実行委員4名にとっても貴重な交流の場となり、有意義な人脈の広がりを実感しました。一方で、今後も若手研究者間のネットワークを継続的に強化していく必要性を改めて認識しました。今回の発表者の分野は生態学の数理モデル分野に偏っていたため、進化生物学分野や統計数理分野の研究者にも講演いただき、より多様な分野の専門家が集い議論を深める場の構築を目指しております。今後とも、皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、本フォーラムでは、公益財団法人中辻創智社様のご支援のもと、希望者に対して旅費の補助を実施いたしました。旅費の負担が参加への障壁となるケースも少なくない中、本支援により遠方からの学生や研究費が限られた若手研究者の参加が可能となりました。また、フォーラムの運営にあたり、統合進化科学研究センター事務局および施設担当の皆様、大槻久准教授に事務手続きなどをお願い致しました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

【統合進化科学コース 学生 一色竜一郎】

2025/2/20 SOKENDAI 社会連携事業「高専生による小型加速器製作を主体とした社会連携事業」高専交流会を開催

2025年2月20日(木)、高エネルギー加速器研究機構(KEK)にて、高専生による加速器製作プロジェクト「AxeLatoon(アクセラトゥーン)」のメンバーによる交流会が開催されました。

■ SOKENDAI 社会連携事業「高専生による小型加速器製作を主体とした社会連携事業」について

SOKENDAI 社会連携事業は、本学の研究や教育の成果を社会に還元することを目的とした事業です。「高専生による小型加速器製作を主体とした社会連携事業」はそのひとつで、全国の工業高等専門学校において加速器製作を中心とした教育プログラムを展開し、加速器製作を通じて、学術に対する広い興味関心の醸成や多彩なキャリアパス形成に貢献することを目的としています。

■ 交流会概要

交流会は、事業の代表である KEK/ 総研大の大谷将士准教授の挨拶、KEK 加速器施設の小関忠施設長の講演につづき、各高専の学生たちによる活動報告が行われました。



大谷准教授



小関施設長

活動報告では、長野高専、豊田高専、小山高専からは製作した加速器の解説、工夫した点や苦勞した点などが報告され、2024年度に入って活動検討を開始している群馬高専、沖縄高専からは、今後の本格的な加速器製作に向けた準備状況などについて報告が行われました。

質疑応答の場面では、装置の製作に関する質問から、「どこで部品を購入したか?」といった具体的な質問も飛び出し、活発な意見交換が行われました。また、各高専に共通する関心事として「高専内における新しい活動メンバーを増やすこと」が挙げられ、そのためにも加速器製作の魅力をどうやってアピールしていくか、といったことについても熱心に意見が交わされていました。



活動報告の様子

交流会では高専生による活動報告のほか、KEK の教育加速器(KETA) や、実験装置の製作などを担う機械工学センター、世界規

模のプロジェクトである国際リニアコライダー(ILC)計画に関わる空洞製造技術開発施設(CFF)の見学も行われ、最先端の装置や施設に高専生たちは興味津々の様子でした。

さらに、昼休みには大阪大学の神田浩樹教授による福島国際研究教育機構(F-REI(エフレイ))の紹介や、KEK 外部連携推進部の古坂道弘氏による教育加速器(KETA)の紹介も行われ、充実した一日となりました。



参加メンバーで記念撮影

今回の交流会は、参加メンバーが互いの知識・経験を共有するとともに、加速器研究の最先端に触れる貴重な経験となったことと思われます。本事業を通じて、高専生の加速器研究の輪がさらに広がることを期待いたします。

>> URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250305.html>

【広報社会連携係】

2025/3/10 - 2025/3/13 2024年度第15回国立天文台・総研大天文科学専攻スプリングスクール 開催

国立天文台・総研大天文科学コースのスプリングスクールプログラムが2025年3月10日(月)から3月13日(木)まで開催されました。これは、将来天文学研究を志す人材を育成するために、大学理工系学部2年または3年に在学する天文学研究に強い意欲を持つ学生を対象として、国立天文台の最先端研究に携わる研究者が天文学基礎の集中講義および体験学習を行うプログラムです。



国立天文台大セミナー室で行われた講義の様子

集中講義では、国立天文台の多様な分野からの9名の教員により、遠方銀河、星形成、恒星磁場活動、太陽・装置開発、恒星、電波天文学、系外惑星、宇宙論、重力波天文学について講義が行われ、日本全国から参加した合計41名の学部学生に、普通の大学の講義ではあまり触れない天文学の専門的な内容を学んでもらいました。集中講義の他、「体験学習」を実施し、太陽から遠方宇宙までの様々なスケールの天体や天文現象についての研究を、解析実習や論文輪読などを通して体験してもらいました。また、2日目の午後には、

4D2U シアターと先端技術センターの施設見学が行われました。最終日の講義のあとには関井コース長から入試情報の説明がありました。

プログラム後のアンケート結果から、同年代の仲間と交流したり、将来の研究方向について考える機会として活用されたことがうかがえ、多くの参加者が様々な講義から新たな知見を得て、質問しやすい環境で有意義な時間を過ごせたという非常に前向きなフィードバックを多数いただきました。また、これまで控えていた懇親会を今年度は開いたことで、教員や総研大生と参加者および参加者同士の交流の機会が得られてありがたかったとの意見も多数いただきました。いただいた意見を参考に、来年度以降も有意義なものにすべく世話人で検討していきたいと思っております。



参加者みなさんと記念撮影

【先端学術院 天文科学コース 伊王野大介（国立天文台 TMT プロジェクト）、鹿野良平（国立天文台 JASMINE プロジェクト）】

2025/4/1 株式会社アカリクとの連携協力に関する協定を締結

2025年4月1日（火）、総合研究大学院大学の永田敬学長と株式会社アカリクの山田諒代表取締役は、在學生・修了生等に対するキャリア開発・就職支援サービスの提供について、相互に連携協力するための協定を締結しました。

本協定は、JST の SPRING プログラムの採択を契機に、アカデミアのみならず博士人材のキャリアパスを拡げる取組みを始めるもので、博士人材に特化した就職相談、キャリアセミナー、能力開発に向けてのワークショップなどの支援策を展開する予定です。

調印式後に行われた永田学長と山田代表による対談では、大学が目指している博士人材、民間企業から見た博士人材の強みと学士・修士人材との違い、最近の博士人材の関心やキャリア志向の変化について、意見交換が行われた後、連携協力による期待、本学へ入学し羽ばたいていく博士人材へのメッセージなどが語られました。



永田学長

山田代表

URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250404.html>

【広報社会連携係】

2025/4/7 「台湾からデニソワ人」記者会見を実施

2025年4月7日（月）、統合進化科学研究センター・髙谷匠助教らの研究チームが研究成果「台湾からデニソワ人—台湾最古の人類化石はデニソワ人男性の下顎骨だった—」について記者会見を実施しました。



髙谷助教

会見場の様子

東京大学総合研究博物館で実施された記者会見には NHKをはじめ新聞社など 10 社が集まり、国際的注目を集める「デニソワ人」とは何か、その実態解明に力を発揮した新たな手法「古代プロテオミクス」とは何か、などの説明に熱心に聞き入り、会見後の質問もなかなか途切れないほどの盛況ぶりでした。さらに、本研究成果の報道解禁日以降、国内外で 100 件を超える記事が各メディアに掲載されるなど、非常に大きな反響がありました。

▶ プレスリリース URL:

<https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250411.html>

【広報社会連携係】

2025/4/18 日本文学研究コース 新入生懇談会を開催

2025年4月18日（金）、日本文学研究コースでは今年度1名の新入生を迎えて、在學生・教員と共に新入生懇談会を行いました。

懇談会では、新入生・教員・在學生の自己紹介の後、当コースの教育研究プロジェクトの調査により収集した、研究において重要な原本を熟覧しました。新入生の研究分野でもある近代作家の草稿をはじめ、様々な資料や日本古典籍について、それぞれを専門領域とする在學生と教員が解説を担当し、知見を深めました。続いて新入生の研究展望や教員の研究生活などを語り合い、親睦を深めました。



日本古典籍などを展覧する様子

当コースは、国文学研究資料館の豊かな文献資料や、研究ネットワークを存分に活用できる点が大きなメリットです。今年度入学した新入生も、学位取得に向けて多くの文献資料に出会い、自身の研究方法を開拓して、充実した学生生活を送られることを願っています。

【日本文学研究コース】

AWARDS

2024/12/10 核融合科学コース 前山伸也准教授

令和5年度 JT-60 共同研究優秀賞受賞

2024/12/17 天文科学専攻 修了生 津久井崇史さん

第41回井上研究奨励賞授賞

>> URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250306.html>

2025/1/22 核融合科学コース 前山伸也准教授

2024年度吉川允二記念核融合エネルギー奨励賞 優秀賞受賞

>> URL: <https://www.gst.go.jp/site/fusion-energy-forum/prizewinner2024.html>

2025/2/10 核融合科学コース 中西秀哉准教授

IEEE 感謝状受領 (IEEE Transactions on Nuclear Science (TNS) 誌への2年余にわたるゲストエディターとしての貢献に対する感謝)

2025/3/12 遺伝学専攻 学生 南克彦さん、飯田史織さん、鳩山雄基さん
森島奨励賞受賞

>> URL: https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2025/03/information_ja/ha20250319.html



左から岩里コース長、南克彦さん、飯田史織さん、鳩山雄基さん

2025/3/15-18 遺伝学専攻 学生 陳柏君さん

日本生態学会 進化・数理分野 優秀賞受賞

>> URL: https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2025/03/information_ja/ha20250318-s.html

2025/3/15-18 遺伝学専攻 学生 神部飛雄さん

日本生態学会 Evolution 分野 最優秀口頭発表賞 (Best Award) 受賞

>> URL: https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2025/03/information_ja/ha20250321.html



神部飛雄さん

2025/3/15 統合進化科学コース 学生 一色竜一郎さん

第72回日本生態学会ポスター賞優秀賞 (進化・数理) 受賞

■ポスタータイトル

和：メスの選り好み仮説はレック型一夫多妻の進化を説明できるか？

英：Can Female Choice Hypothesis Explain the Evolution of Lek?

■受賞コメント

大槻先生をはじめとして日頃から議論を交わさせていただいた研究室の皆様のおかげで、受賞することができました。今回の発表では、メスの配偶者選択がレックの進化に与える影響について理論的に示唆を与えたことが受賞につながりましたが、今後はより厳密にその影響を明らかにできるようにしていきます。

>> URL: <https://www.esj.ne.jp/esj/award/poster/list.html>



一色竜一郎さん

2025/3/18 核融合科学コース 武村勇輝助教

第 19 回日本物理学会若手奨励賞受賞

>> URL: <https://www.jps.or.jp/activities/awards/jusyosya/wakate2025.php>

2025/3/19 生命共生体進化学専攻 学生 徳永 壮真さん

第 72 回日本生態学会英語口頭発表 最優秀賞受賞

■英語口頭発表タイトル

Extraordinary thermoregulation abilities of shortfin mako sharks as the key adaptive significance of regional endothermy in fishes

■受賞コメント

この度は、日本生態学会という大きな規模の学会で、このような賞を頂けて大変うれしく思います。指導して下さった渡辺佑基教授や共同研究者の皆様、発表を聴いてくださった方々に感謝申し上げます。今後も野外調査を主軸として、様々なサメの生態を解き明かせるよう、研究に励みたいと思います。

>> URL: <https://www.esj.ne.jp/esj/award/epa/72.html>



徳永 壮真さん

2025/3/31 人類文化研究コース 菅瀬晶子准教授

BRAW Amazing Bookshelf 2025 - Sustainability: 17 Goals for a Better Future に選出

■菅瀬晶子准教授の著書『ウンム・アーザルのキッチン』（平澤朋子絵、福音館書店）が、世界最大の児童書見本市であるポーニャ・ブックフェアの「BRAW Amazing Bookshelf 2025 - Sustainability: 17 Goals for a Better Future」に選出されました。持続可能性をテーマとした応募作品の中から特に優れた 150 冊が選出され、選ばれた書籍は 2026 年初めにニューヨークの国連本部でも展示される予定です。

※人類文化研究コースの菅瀬晶子准教授は、2006 年度に地域文化化学専攻を修了され、その後、葉山高等研究センター上級研究員、学融合推進センター特別研究員等を経て、2011 年 4 月に国立民族学博物館に戻られました。教員として学生に寄り添いながら熱心にご指導いただいておりますが、去る 3 月 31 日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

>> URL: https://www.facebook.com/story.php/?story_fbid=1092995609538861&id=100064852953901

2025/4/15 遺伝学コース 川口茜助教

令和 7 年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞受賞

>> URL: https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2025/04/information_ja/20250409.html



川口茜助教

Press Release

2025/2/25

高温超伝導が生じる舞台となる「奇妙な金属状態」に光をあてる ～高温超伝導の起源の解明や量子技術への応用に期待～

研究概要

広島大学大学院先進理工系科学研究科博士課程後期3年の宮井雄大、広島大学放射光科学研究所准教授の出田真一郎、同教授の島田賢也、広島大学技術センター技術専門職員の有田将司、室蘭工業大学大学院工学研究科准教授の黒澤徹、北海道大学名誉教授の小田研、自然科学研究機構分子科学研究所/総合研究大学院大学准教授の田中清尚の研究チームは、銅酸化物高温超伝導が生じる舞台となる「奇妙な金属状態（ストレンジメタル）」の特徴を初めて可視化しました。研究グループは、新たな解析手法を開発して、放射光や紫外線レーザーを用いた高分解能角度分解光電子分光を行い、奇妙な金属状態の性質を反映する「自己エネルギー」の全貌を初めて可視化しました。本研究により、超伝導転移温度に近づくと、電子に働く力が強くなることが明らかとなりました。しかしこの振る舞いは、原子の振動をもとに超伝導を考える従来の理論では説明できず、高温超伝導を発現させる未知のメカニズムがあることを示しています。奇妙な金属状態が示す様々な性質は、ミクロな粒子の集団に特有な量子現象であり、量子コンピュータなどの量子技術でも活用される性質です。本研究成果は高温超伝導の起源の解明に貢献するとともに、超伝導技術を用いた電力輸送、医療機器への応用研究、超伝導量子ビットを用いた量子コンピュータへの応用研究への展開が期待できます。

本研究成果は米国物理学会が発行する「Physical Review Research」のレターセクションにおいて2025年2月24日付（アメリカ東部時間）でオンライン掲載されました。本研究は科学研究費事業（課題番号：22K03495、22K03504（基盤研究C））による支援を受け、広島大学放射光科学研究所共同研究委員会によ

2025/2/25

仲良しだから緊張する：野生ニホンザルの社会的ストレスに関する新規な現象の発見

研究概要

「この人のそばにいとちょっと緊張するな…」という瞬間は、誰しもあるでしょう。そういうとき、なんとなくソワソワして、意味もなく髪の毛をいじったり、腕を触ったりしませんか？では、どういうときに、誰といるとそうなるのでしょうか。

ヒト以外の霊長類でも、緊張する状況やストレスがかかる場面で自分の身体をひかくく“セルフスクラッチング（以下、スクラッチ）”という行動が見られます（図1a）。ストレスレベルが高まる場面では、そうでない場面よりもスクラッチの頻度が高くなることが知られています。本研究では、野生ニホンザルのメスを対象に、このスクラッチの発生パターンを調べ、仲がいい血縁関係にある個体と一緒にいるときに高いストレスレベルを示すという、これまでに報告されていない、直感に反する現象を発見しました。この現象はメスが採食中にもみ確認され、休息中には確認されなかったため、血縁個体との餌をめぐる競争がストレスの原因であると考えられます。

り採択された研究課題（課題番号：22AG005、22BG004）、および、分子科学研究所 UVSOR-III により採択された研究課題（課題番号：22IMS6850）のもとで実施されました。また本研究の公表にあたり広島大学の APC 助成を受けました。

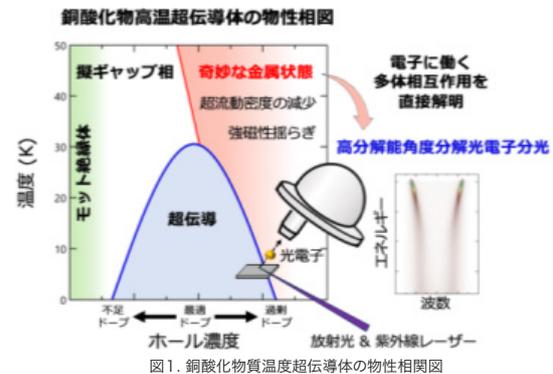


図1. 銅酸化物物質温度超伝導体の物性相関図

論文情報

- ≫ 掲載誌: *Physical Review Research*(Q1)
- ≫ 論文タイトル: Dual origin in the temperature dependence of the coupling parameter for the strange metal state in heavily overdoped cuprate superconductor
- ≫ 著者: Yudai Miyai*, Shin-ichiro Ideta, Masashi Arita, Kiyohisa Tanaka, Migaku Oda, Tohru Kurosawa*, and Kenya Shimada* (*責任著者)
- ≫ DOI: [10.1103/PhysRevResearch.7.L012039](https://doi.org/10.1103/PhysRevResearch.7.L012039)
- ≫ URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250225.html>

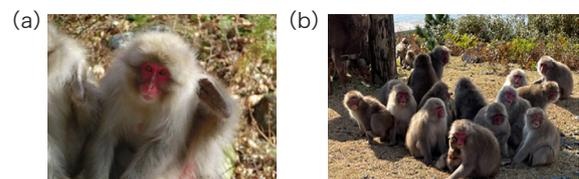


図1 金華山の野生ニホンザル。(a) セルフスクラッチング。左後肢で首のあたりを掻いている。(b) 群れの個体がまとまっている。

論文情報

- ≫ 掲載誌: *Animal Behaviour*
- ≫ 論文タイトル: Influence of proximate individuals on self-scratching behaviour in wild Japanese macaques
- ≫ 著者: 関澤麻伊沙¹（特別研究員）、沓掛展之¹（教授）
¹ 総合研究大学院大学・統合進化科学研究センター
- ≫ DOI: <https://doi.org/10.1016/j.anbehav.2025.123111>
- ≫ URL: https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250225_1.html

2025/3/3

マウス顔面発生大図解：哺乳類の口先は、爬虫類の鼻孔近くの小骨から進化した

研究概要

私たちを含む哺乳類の顔は、顎や鼻、一対の眼があるという点において爬虫類や両生類と同じつくりに見えますが、実は大きな違いがあります。哺乳類の顔には突き出た動く鼻先が口先とは別にあり、上アゴの先に鼻の孔が開いただけの爬虫類や両生類の顔とは大きく異なるのです。しかし、こうした哺乳類顔がどのように進化してきたのかは長いあいだ見過ごされてきた謎でした。総合研究大学院大学統合進化科学研究センター（RCIES）の東山大毅研究員を中心としたチームは、哺乳類であるマウスの骨格・神経・血管（動脈・静脈）を含む顔面形成の過程を網羅的に詳しく記載し、ヒトやマウスなどの哺乳類顔と他の脊椎動物と顔のパーツがどのように対応づけられるのかを明らかにすることで、哺乳類顔の進化について新しい仮説を支持する結果を得ました。まず、マウスの顔の発生は他の哺乳類と共通した典型的な軟骨頭蓋や神経の形成パターンを示し、哺乳類顔のモデル動物として適切であることを確認しました。次に、哺乳類の上アゴを構成する骨格は爬虫類とは異なるパーツを用いたものであることが改めて強く示唆され、過去に東山大毅研究員らが提唱した「哺乳類の鼻が爬虫類の上アゴの先から進化した」とする仮説の正しさを再確認しました。本研究で得られた詳細な比較形態学的知見は、ヒトの顔の形成過程や疾患とも統一的に説明できる他、マウスをモデルとする医学・生物学研究の基盤を強化し、顔の進化や形成異常の理解に貢献すると期待されます。

2025/3/12

光で変形する分子が“芳香族性”を獲得する瞬間を初観測 —超高速計測で明らかにした段階的な平面化プロセス—

研究概要

分子科学研究所／総合研究大学院大学の米田勇祐助教、倉持光准教授、大阪大学大学院理学研究科の齊藤尚平教授、京都大学理学研究科の須賀健介大学院生、小西智暉大学院生（研究当時）らの研究グループは、励起状態芳香族性を示す分子が光照射後に構造変化を起こす過程を、フェムト秒（ 10^{-15} 秒）過渡吸収分光と時間分解インパルス誘導ラマン分光法（TR-ISRS）を用いて詳細に調べました。その結果、数百フェムト秒以内に大きな電子状態の変化が生じた後、ピコ秒（ 10^{-12} 秒）の時間スケールで平面化が段階的に進むことを初めて直接観測しました。

さらに量子化学計算を組み合わせ、解析したところ、励起後の分子は最初から曲がった構造のまま芳香族性を示し、そこから平面化が進むにつれて芳香族性がより強まっていくことがわかりました。この成果は、励起状態芳香族性という現象を、超高速で変化する分子構造の動きを通してとらえ、今後の高効率な光エネルギー変換材料や光応答性材料などの設計指針に新たな視点を与えると期待されます。

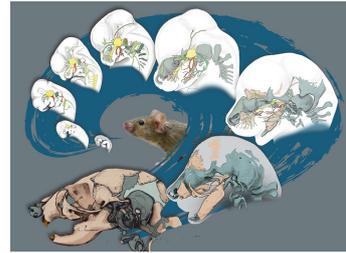
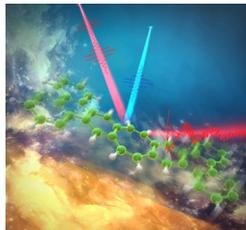


図1：マウスの頭部の個体発生。骨格（軟骨や硬骨）と神経を图示。

論文情報

- ≫ 掲載誌：*Journal of Morphology*
- ≫ 論文タイトル：On the maxillofacial development of mice, *Mus musculus*
- ≫ 著者：東山 大毅（総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター・特別研究員）、黒田 春也（金沢大学 新学術創成研究機構・博士研究員）、岩瀬 晃康（東京大学 アイソトープ総合センター・特任助教）、入江 直樹（総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター・教授）、栗原 裕基（東京大学 アイソトープ総合センター・特任教授 / 熊本大学 国際先端医学研究機構・卓越教授）
- ≫ DOI：<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/jmor.70032>
- ≫ URL：<https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250303.html>

本研究成果は、国際学術誌『*Journal of the American Chemical Society*』に、2025年3月9日付でオンライン掲載されました。

論文情報

- ≫ 掲載誌：*Journal of the American Chemical Society*
- ≫ 論文タイトル：“Excited-State Aromatization Drives Nonequilibrium Planarization Dynamics.”（「励起状態芳香族性が非平衡平面化ダイナミクスを駆動する」）
- ≫ 著者：Yusuke Yoneda,^[a,b] Tomoaki Konishi,^[c] Kensuke Suga,^[c,d] Shohei Saito,^{*(d)} and Hikaru Kuramochi^{*(a,b)}
- a. Research Center of Integrative Molecular Systems (CIMoS), Institute for Molecular Science, National Institutes of Natural Sciences
- b. Graduate Institute for Advanced Studies, SOKENDAI
- c. Department of Chemistry, Graduate School of Science, Kyoto University
- d. Department of Chemistry, Graduate School of Science, Osaka University
- * 責任著者
- ≫ DOI：[10.1021/jacs.4c18623](https://doi.org/10.1021/jacs.4c18623)
- ≫ URL：<https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250312.html>

2025/3/14

AIを活用し化学反応の理解を自動化する仕組みを開発—深層学習による反応機構の解明をより容易に—

研究概要

化学反応の反応物と生成物を隔てる遷移状態は、反応の成否を決める重要な状態です。遷移状態の予測は反応制御に向けて重要ですが、多数の原子・多くの構造の候補から遷移状態を正確に予測することは難しいとされてきました。近年、AIを活用した遷移状態予測が盛んになっており、中でも深層学習は画像認識をはじめ多くの成功を収めている強力な手法であるものの、深層学習モデルの形（ノード数などのアーキテクチャ）を決めるのが煩雑であり、化学反応への適用の大きな障害となっています。

今回、九州大学、大阪大学および分子科学研究所の共同研究グループは、深層学習モデルを自動的に決定し、化学反応の遷移状態の予測を実現する方法を開発しました。さらに、適切に設計された深層学習モデルは、アーキテクチャによらず遷移状態の特徴を正しく捉えられることを世界で初めて明らかにしました。

九州大学先端物質化学研究所の川島恭平助教、佐藤拓海氏（総合理工学府・博士前期課程修了）、森俊文准教授は、大阪大学大学院基礎工学研究科の金鋼准教授、松林伸幸教授、分子科学研究所／総合研究大学院大学の岡崎圭一准教授とともに、化学反応の遷移状態を予測する深層学習を自動的に構築する手法を開発し、これを用いて多数の原子が存在する系でも遷移状態を適切に予測できることを示しました。さらに、様々な深層学習モデルを調べることで、モデルの形が異なっても、得られる遷移状態の特徴は変わらないことを明らかにしました。

今回の発見は、深層学習による広範な化学反応の遷移状態予測の実現に重要な一歩であり、AIを用いた化学反応の設計や、深層学習を用いた様々な課題解決の効率化に貢献できることが期待されます。

本研究成果は、米国物理学協会が発行する APL Machine Learning 誌に 2025 年 3 月 14 日(金)午前 2 時 30 分(日本時間)に掲載されます。また、特に注目すべき論文として、Editor's Pick にも選ばれました。

2025/3/26

クレオール言語が広がる条件を理論的に解明—新しい言語はどんな時に誕生するか—

研究概要

集団に複数の言語が存在する時に、そこで最終的にどんな言語が話されるようになるのかという問題は、言語学や他分野からも注目を集めてきました。このような場合に、二つの言語が混合して新しい言語が生じ母語として定着することがあります。このようにしてできた言語をクレオール言語と呼びます。

これまでの数理モデルを用いた理論研究では、二つの異なる言語が出会った場合、集団内で多数派を占める側が話す言語や、社会的地位が高い側が話す言語が、最終的に集団に定着することが分かっていました。

しかし、クレオール言語がどのように社会に広まり話されるように

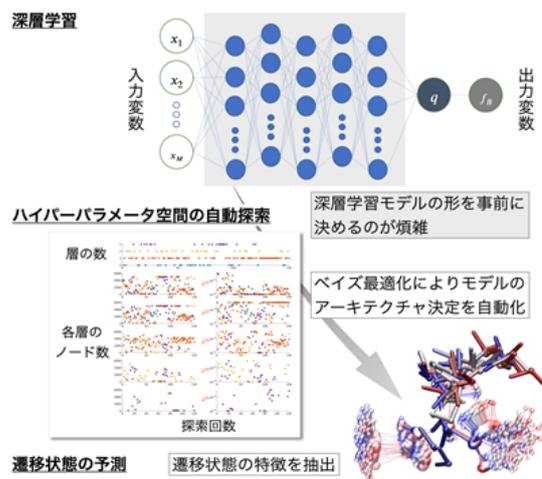


図1. (上) 深層学習モデルの概要。入力変数と出力変数をつなぐ中間層の数、各層におけるノード（丸）の数などを事前に指定する必要がある。

(中央) ハイパーパラメータ（※3）の自動探索過程。ベイズ最適化によって層の数、各層のノードの数などを調整する。

(下) 最適化した深層学習モデルを用いて予測した水中での反応の遷移状態構造。多数の原子が関与する反応であっても遷移状態を適切に予測できることを明らかにした。

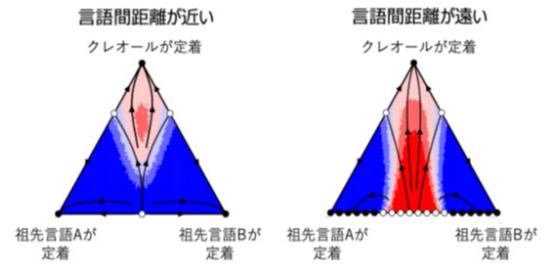
論文情報

- » 掲載誌: *APL Machine Learning*
- » 論文タイトル: Investigating the hyperparameter space of deep neural network models for reaction coordinates
- » 著者: 【Kyohei Kawashima, Takumi Sato, Kei-ichi Okazaki, Kang Kim, Nobuyuki Matubayasi, Toshifumi Mori
- » DOI: [10.1063/5.0252631](https://doi.org/10.1063/5.0252631)
- » URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250314.html>

本研究の成果は、いつクレオール言語のような言語が生じるのかという言語学の問いに新たな視点を与えるだけでなく、人間の持つ様々な文化的性質の生成と消滅の一般法則にも迫るもので、世界に存在すると言われる約 7,000 もの言語の多様性の理解や、少数言語の保全の取り組みにも貢献すると考えられます。

論文情報

- » 掲載誌: *Journal of Theoretical biology*
- » 論文タイトル: Conditions for the establishment of creole languages from an evolutionary game theoretic perspective
- » 著者: 中野 来喜 (総合研究大学院大学 先端学術院 先端学術専攻 統合進化科学コース 5年一貫制博士課程 2年)、大槻 久 (総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター・准教授)
- » DOI: [10.1016/j.jtbi.2025.112090](https://doi.org/10.1016/j.jtbi.2025.112090)
- » URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250326.html>



祖先言語間の距離の違いによる結果の比較。矢印は、無限集団モデルにおける各言語話者の時間変化を表す。集団が小さい場合においては、赤色が濃いほどクレオール言語が集団に定着しやすいことを示している。祖先言語間の距離が遠いとクレオール言語が定着しやすい (右)。

2025/3/31

生きた細胞内で「ユークロマチン」と「ヘテロクロマチン」のふるまいを見分ける新技術を開発

研究概要

ヒトのゲノム DNA は、クロマチンとして細胞内に収納され、遺伝情報の読み出し (転写) が活発な「ユークロマチン」と、抑えられた「ヘテロクロマチン」に分類されます。しかし、生きた細胞内で両者を識別することはこれまで困難でした。

このたび、情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所の南克彦 総合研究大学院大学 (総研大) 大学院生、仲里佳子 総研大大学院生、井手聖助教 (現 東京科学大学 助教)、田村佐知子 テクニカルスタッフ、前島一博 教授のグループは、東光一 助教、黒川顕教授のグループ、豊田敦 特任教授のグループ、さらに理化学研究所の海津一成 上級研究員、高橋恒一 チームリーダーと共同で、生きた細胞内のユークロマチンとヘテロクロマチンを別々に標識できる新技術「Repli-Histo 標識」を開発しました (図1)。この技術を用いて、超解像蛍光顕微鏡により詳細に観察・解析を行いました。

その結果、ユークロマチンはヘテロクロマチンよりも大きく揺らいでいることが明らかになりました。さらに、ゲノム DNA は、揺らぎの大きな領域から順に複製 (コピー) されていくことを発見しました。クロマチンの揺らぎの大きさは、ゲノム DNA の遺伝情報の読み出しやすさとも密接に関係しています。本研究の成果は、DNA 上の遺伝情報がどのように複製・読み出されるのかを理解する手がかりを与えるとともに、これらの過程に欠陥をもつ「がん」などの遺伝的疾患の理解にもつながることが期待されます。

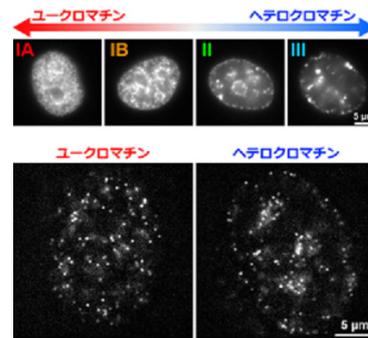


図1: (上) 本研究で開発した複製依存的ヒストン標識 (Repli-Histo 標識)。遺伝情報の読み出し (転写) が活発なユークロマチン (領域 IA・IB) と、読み出しが抑制されたヘテロクロマチン (領域 II・III) を、それぞれ別々に可視化できる。(下) 超解像蛍光顕微鏡を用いた生きた細胞の核内のヌクレオソーム観察。Repli-Histo 標識法により、ユークロマチンとヘテロクロマチンにおけるヌクレオソームの動きをそれぞれ可視化できる (動画1を参照)。白いドットが個々のヌクレオソームを示す。

論文情報

- » 掲載誌: *Science Advances*
- » 論文情報: Replication-dependent histone labeling dissects the physical properties of euchromatin/heterochromatin in living human cells. (複製依存的ヒストン標識が明らかにする、ユークロマチンとヘテロクロマチンの物理的ふるまい)
- » 著者: Katsuhiko Minami, Kako Nakazato, Satoru Ide, Kazunari Kaizu, Koichi Higashi, Sachiko Tamura, Atsushi Toyoda, Koichi Takahashi, Ken Kurokawa, Kazuhiro Maeshima* (* 責任著者) (南克彦、仲里佳子、井手聖、海津一成、東光一、田村佐知子、豊田敦、高橋恒一、黒川顕、前島一博*)
- » DOI: <https://doi.org/10.1126/sciadv.adu8400>
- » URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2024/20250331.html>

2025/4/11

台湾からデニソワ人—台湾最古の人類化石はデニソワ人男性の下顎骨だった—

研究概要

- ・ 総合研究大学院大学の髙谷匠助教と澤藤りかい特別研究員（現九州大学講師）、東京大学の海部陽介教授と太田博樹教授、台湾の国立自然科学博物館の張鈞翔センター長、コペンハーゲン大学のフリード・ウェルカー准教授とエンリコ・カッペリーニ准教授など、日本、台湾、デンマークの国際共同研究チームは、台湾最古の人類化石の古代タンパク質配列を調べ、これが旧人の「デニソワ人」男性に由来することを明らかにし、*Science* 誌に報告しました。
- ・ 台湾の澎湖（ほうこ）水道の海底から発見されていた原始的な人類（澎湖人）の下顎骨化石（澎湖1号：19–1万年前）は、発表当時、その形態の独自性と原始性から「アジアで発見された第4の原人」とされました（図1）。その形態学的評価は変わりませんが、今回の分析で、人類進化史におけるその位置づけが変わりました。
- ・ アジア東部、特に南東部の現代人のゲノムにはデニソワ人由来の要素があり、当地で両者が交雑したと推測されていました。しかし、デニソワ人の化石はこれまでアジア北部でしかみつかっていませんでした。本研究は、デニソワ人がアジア南東部にも分布していたことを化石の物的証拠から直接的に示しました。
- ・ 本研究は、同時代に地球上に生息したネアンデルタール人や私たちホモ・サピエンスと比べて、デニソワ人の顎と歯がだいぶ頑丈でぶといことも明らかにしました。これらの成果によって、謎に包まれていたデニソワ人の姿や分布がより明確になりました。



図1. 澎湖1号の下顎骨を右側面から写した写真。(撮影：東京大学・海部氏)

論文情報

- ≫ 掲載誌：*Science*
- ≫ 論文タイトル：A male Denisovan mandible from Pleistocene Taiwan
- ≫ 著者：髙谷 匠（コペンハーゲン大学 Globe Institute・特別研究員、総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター・助教）、澤藤 りかい（コペンハーゲン大学 Globe Institute・特別研究員、総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター・特別研究員、九州大学大学院 比較社会文化研究院・講師）、Alberto J. Taurozzi（コペンハーゲン大学 Globe Institute・助教）、Zandra Fagernäs（コペンハーゲン大学 Globe Institute・博士研究員）、Ioannis Patramanis（コペンハーゲン大学 Globe Institute・博士研究員）、Gaudry Troche（コペンハーゲン大学 Globe Institute・技術支援員、コペンハーゲン大学 Novo Nordisk Foundation Center for Protein Research・技術支援員）、Meaghan Mackie（コペンハーゲン大学 Globe Institute・技術支援員、コペンハーゲン大学 Novo Nordisk Foundation Center for Protein Research・技術支援員、ダブリン大学 School of Archaeology・博士課程大学院生、トリノ大学 Department of Life Sciences and Systems Biology・博士課程大学院生）、寛張 隆史（金沢大学 古代文明・文化資源学研究所 / 医薬保健研究域 附属サピエンス進化医学研究センター・准教授）、太田 博樹（東京大学 大学院理学系研究科・教授）、蔡 政修（國立臺灣大學 Department of Life Science and Institute of Ecology and Evolutionary Biology・准教授、国立科学博物館 地学研究部・客員研究員）、Jesper V. Olsen（コペンハーゲン大学 Novo Nordisk Foundation Center for Protein Research・教授）、海部 陽介（東京大学 総合研究博物館・教授）、張 鈞翔（国立自然科学博物館 Center of Science・センター長）、Enrico Cappellini（コペンハーゲン大学 Globe Institute・准教授）、Frido Welker（コペンハーゲン大学 Globe Institute・准教授）
- ≫ DOI: <https://doi.org/10.1126/science.ads3888>
- ≫ URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250411.html>

2025/4/16

キラリティと超伝導の協奏が生む巨大な超伝導整流—らせん構造が作るスピン三重項クーバー対—

研究概要

近年、らせん状の構造を持つキラル分子中を電子が通過すると、通過した電子に巨大なスピン偏極が誘導される、との報告が相次いでいます。この現象は、「キラリティ誘起スピン選択性 (Chirality-Induced Spin Selectivity : CISS) と呼ばれ、世界中で爆発的に研究が行われているトピックです。この CISS 効果には、キラルな構造内に本質的に存在する、電子とスピンの非自明な結合機構が関与していると考えられています。しかし、その傍証は多数報告されているものの、それを定量的に評価することは困難であり、CISS 研究における重要な課題とされてきました。

この課題を解決すべく、今回、自然科学研究機構 分子科学研究所 協奏分子システム研究センター／総合研究大学院大学の佐藤拓朗助教、後藤拓大学院生、山本浩史教授らの研究チームは、キラルな対称性を持つ有機超伝導体に着目し、スピン軌道相互作用と密接に関連する非相反性を検証しました。その結果、超伝導状態において、理論予測値を大きく上回る巨大な非相反伝導を観測することに成功しました。特筆すべきは、このような巨大応答を、非相反伝導に必須とされるスピン軌道相互作用が非常に小さな有機物質中で発現した点です。これにより、キラリティがもたらす非自明な電子の運動とスピンとの結合が示唆され、さらにその強度が通常の有機物質におけるスピン軌道相互作用から予想される値を大幅に超えることが分かりました。また、キラリティが誘導するスピン三重項クーバー対の生成を仮定すると、観測された巨大非相反効果が説明できることも明らかになりました。本成果は、キラリティという特徴的な構造を軸に、新たな超伝導デバイスや機能性設計の指針を与えることが期待されます。

本研究成果は、2025 年 4 月 15 日（現地時間）にアメリカの学術誌「Physical Review Research」のオンライン版で公開されました。

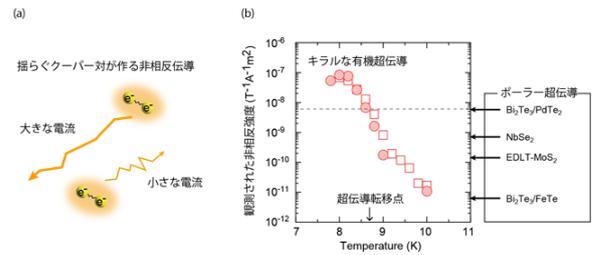


図 1 (a) 超伝導における非相反伝導の模式図。クーバー対の揺らぎが作る有限の抵抗値がある進行方向と 180 度逆の進行方向とで、異なる値を持つため、方向に応じて流れる電流値が異なる。(b) 有機キラル超伝導において観測された巨大な非相反伝導。比較のため、無機ポラー超伝導における非相反伝導の強度を右側に示した。無機系ポラー超伝導における従来の報告例の最大値を、有機キラル超伝導が上回っていることが分かる。

論文情報

- >> 掲載誌: *Physical Review Research*
- >> 論文タイトル: “Sturdy spin-momentum locking in a chiral organic superconductor” (キラルな有機超伝導で生じる巨大スピン軌道結合)
- >> 著者: Takuro Sato, Hiroshi Goto and Hiroshi M. Yamamoto
- >> DOI: [10.1103/PhysRevResearch.7.023056](https://doi.org/10.1103/PhysRevResearch.7.023056)
- >> URL: <https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250416.html>

研究助成学生の研究紹介

SOKENDAI 研究派遣プログラム等に採択された学生の研究概要を順次本学ホームページに紹介しています。

<https://www.soken.ac.jp/student-research/index.html>

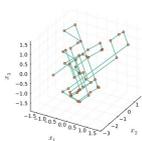
新規掲載情報



超伝導遷移型センサー (TES) 性能評価

- >> 池本拓朗
- >> 素粒子原子核
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: https://www.soken.ac.jp/student-research/20250214_2.html

Trajectory (up to 150 events)



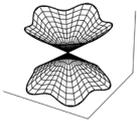
政治科学を加速する統計計算アルゴリズムの開発

- >> 司馬博文
- >> 統計科学
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: https://www.soken.ac.jp/student-research/20250214_1.html



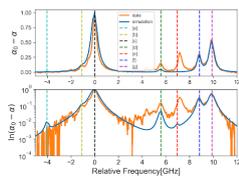
Gaining Expertise for High-Power Input Coupler Development

- >> Pragma Nama
- >> 加速器科学
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: <https://www.soken.ac.jp/student-research/20250304.html>



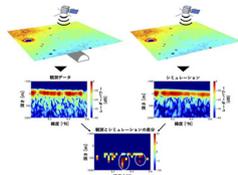
Exploring CPT-Invariant Path Integrals in 3D Quantum Gravity

- >> CHOU, Chien-Yu
- >> 素粒子原子核
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: https://www.soken.ac.jp/student-research/20250328_2.html



Simulating Doppler-free Spectroscopy (DFSS) on LTX-beta: a Collaboration with PPPL

- >> Joseph John Simons
- >> 核融合科学
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: <https://www.soken.ac.jp/student-research/20250328.html>



衛星搭載レーザーを用いた月の地下空洞検出手法の開発

- >> 野澤仁史
- >> 宇宙科学
- >> SOKENDAI 研究派遣プログラム
- >> URL: <https://www.soken.ac.jp/student-research/20250418.html>

メディア情報

2024/12/24 **せんりプラットフォーム**

- 山由中里子教授（人類文化研究コース）
- タイトル：SENRI COLORS #006 国立民族学博物館（みんな）山中教授が、みんなの魅力を紹介
- URL：<https://senri-platform.org/senicolors/2313/>

2025/1/7 **京都新聞**

- 広瀬浩二郎教授（人類文化研究コース）
- タイトル：現代のことは 耳学耳習
- URL：<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/1400966>

2025/1/29 **MBS よんチャン TV**

- 日高真吾教授（人類文化研究コース）
- タイトル：5時のニュース
民俗博物館の収蔵庫が""パンク状態""「資料整理が一番大きな仕事に」専門家らが視察
日高教授がコメント

2025/2/7 **科学新聞**

- 学生 南條舜（統計科学専攻）
- タイトル：機械学習と分子シミュレーションを融合

2025/2/19 **京都新聞**

- 斎藤玲子准教授（人類文化研究コース）
- タイトル：現代のことは 夏の年と冬の年
- URL：<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/1425681>

2025/3/6 **eo 光チャンネル**

- 山中由里子教授、日高真吾教授（人類文化研究コース）
- タイトル：本館展示や、特別展「民具のミカタ博覧会」の準備のようすを紹介
- URL：<https://11ch.eonet.jp/program/world/03779.html>

2025/3/18 **東京新聞**

- 関澤麻伊沙特別研究員（統合進化科学研究センター）
- タイトル：野生ニホンザルの雄のストレス行動
- URL：<https://www.tokyo-np.co.jp/article/392489?rct=kanagawa>

2025/4/6 **神奈川新聞**

- 寺井洋平准教授（統合進化科学コース）
- タイトル：清川村に残るニホンオオカミの骨…「本物があるとは」進む調査とその成果

イベント情報

日程	イベント名	URL	実施機関
2025/3/13- 2025/6/17	みんな創設50周年記念企画展「点と線の美学——アラビア書道の軌跡」	https://www.minpaku.ac.jp/ailec/event/56835	国立民族学博物館 相島葉月准教授
2025/3/20- 2025/6/3	みんな創設50周年記念特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素」	https://www.minpaku.ac.jp/ailec/event/54156i	国立民族学博物館 日高真吾教授
2025/4/1- 2026/3	分子科学研究所 短期インターンシップ	https://www.ims.ac.jp/education/event.html	分子科学研究所
2025/5/10	統合進化科学コース 講演会・説明会『大学院で学ぼう！研究最前線』	https://www.soken.ac.jp/event/2025/20250510.html	統合進化科学コース
2025/5/16	2025年度 大学院入試説明会	https://soken.nifs.ac.jp/archives/admissions_info/setsumeikai	核融合科学コース
2025/6/14	分子科学研究所 オープンキャンパス	https://www.ims.ac.jp/opencampus/	分子科学研究所
2025/6/20	国立情報学研究所オープンハウス2025	https://www.nii.ac.jp/event/openhouse/	国立情報学研究所
2025/6/20	情報学コース 大学院説明会 ※国立情報学研究所オープンハウス 2025 と同時開催	https://www.nii.ac.jp/graduate/	情報学コース
2025/7/10	【オンライン開催】第143回分子科学フォーラム 講演者：唯美津木(名古屋大学 教授)	https://www.ims.ac.jp/research/seminar/2025/02/27_6579.html	分子科学研究所
2025/9/4- 2025/12/9	特別展「舟と人類—アジア・オセアニアの海の暮らし」	https://www.minpaku.ac.jp/ailec/event/59680	国立民族学博物館 小野林太郎教授
2025/9/18- 2025/12/16	企画展「フォルモサ∞アート——台湾の原住民芸術の現在(いま)」		国立民族学博物館 野林厚志教授

その他

【学生インタビュー】

本学の魅力を伝えることを目的に、学生インタビューを行い、その記事および動画を Web サイトに掲載しております。ここでは最新の記事を抜粋して掲載しております。是非 Web サイトにて全文をご覧ください。

>> <https://www.soken.ac.jp/outline/pr/dialogue/index.html>

■世界をより立体的にみる

地域文化学専攻 劉丹さん (博士後期課程3年次)



中国出身の地域文化学専攻（博士後期課程3年次）の劉丹さんは、現在、中国の農村部のハス農家を対象に、ハス（蓮）の栽培について人類学的に研究しています。日中を行き来しながら充実した研究生活を送る劉さんに、日本に留学したきっかけや、文化人類学との出会い、長期にわたって現地で調査活動を行うフィールドワークの魅力などについて聞きました。

(インタビュアー：科学技術ライター 藤木信徳)

インタビュー内容

- ・ 日本に来られた経緯
- ・ なぜ日本に興味があったのか
- ・ 人類学を志して入学した沖縄の大学院での研究内容
- ・ 総研大を選んだ理由
- ・ 日本語の勉強法について
- ・ なぜハス農家を対象に研究しているのか
- ・ フィールドワークはどのように進めるのか
- ・ フィールドワークで心がけていることは
- ・ みんなくで送る学生生活の楽しみは
- ・ 今後の研究の目標

>> 全文 URL : <https://www.soken.ac.jp/news/2025/20250414.html>



左から劉丹さん、藤木さん

編集後記

厳寒のシーズンが終わり、そこかしこに淡いピンクの桜が咲き誇る頃となりました。葉山キャンパス内外でも多くの桜が咲き、今年は不安定な天気が続いたことで長く花見を楽しむことができました。そのような季節の中、総研大では学位記授与式および入学式が行われ、多くの方々が新しい環境でのスタートを切りました。世間では、経済的にも安全的にも多くの不安な要素がありますが、それぞれが広い視野を持って、目標に向かって邁進されることを願っています。

(広報社会連携係)



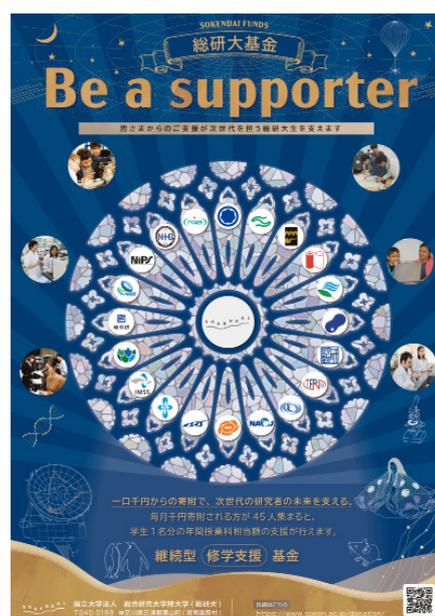
葉山キャンパス付近より富士山を望む

総研大基金によるご支援について

本学では、経済的に困難を抱える学生の支援等を推進するため、総研大基金を設立しています。ぜひ皆様のご支援をお願いいたします。

【詳細はこちら】

<https://www.soken.ac.jp/donation/>



広報社会連携係では、メディアを通じて総研大の研究成果を広く社会に発信しています。特に、総研大学生が筆頭著者として研究論文を出版する際など、プレスリリースを行う場合は、総研大と基盤機関との共同プレスリリースを行っておりますので、是非総研大広報社会連携係までご連絡ください。

また、学生や教員のメディア出演や受賞・表彰、地域社会と連携・密着したアウトリーチ活動といった社会連携・貢献活動など、様々な活動について、ニュースレター、ウェブ掲載等により発信しておりますので、是非情報をお寄せください。

なお、研究論文を投稿する場合やメディア等へ出演される場合は「総合研究大学院大学」と表記いただき、総研大の知名度向上へご協力ください。

2025年5月発行

編集・発行

国立大学法人 総合研究大学院大学

総合企画課広報社会連携係

神奈川県三浦郡葉山町 湘南国際村

TEL: 046-858-1629

Email: kouhou1@ml.soken.ac.jp

© 2025 SOKENDAI